
魔女の使えるたった一つの魔法

芝山 玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の使えるたった一つの魔法

【Nコード】

N7215Y

【作者名】

芝山 玲

【あらすじ】

森には魔法が住んでいた。村では魔法をいないものとして扱っていた。

けれど村の女たちは、どんな時に魔法に頼ればいいのかを、代々母から娘へと伝えていた。

企画競作、と思ったら「腰痛」はお題から漏れていた。

（前書き）

企画競作スレのお題「腰痛」のつもりで書いていたら候補に挙がっただけで外れてました。まあいいや、ってことで。

森には魔女が住んでいた。

魔女は季節が変わるたびに村へとやってくる。村で一つしかない薬局へ薬を卸すためだ。

編み目のはつきりしなくなったショールを頭から被り、肩からもかけ、腰にも巻き付けている。フェルトなのか毛布なのかよくわからない、毛羽立った素材のもったりとしたスカートはくるぶしをも隠していて、それもショールと同じく何枚重ねているのか分からない。スカートからのぞく足先は、手入れはしているようで土埃などはついていないのだがすっかりくたびれしわだらけになってしまったブーツ。手には色あせたチェックの布を被せた、ツタで編んだバスケットを提げ、魔女は森の中にある小さな家からえっちらおっちらと薬局まで歩いてくる。

声をかける者はいない。

遠巻きにするでもない。

村の者は、小さな子供でさえも弁えていて、魔女を見つけたからと言って騒ぐような真似などしなかった。

ただ、いないものとして扱っていた。

たとえ自分たちが熱を出した際にまた腹を下した際に世話になる薬をこの魔女が作っているとしても、だ。

だから今日も魔女は、村人の視界に入りながらも見られてはいない、という奇妙な状況で村の目抜き通りである、土が人と車輪とでしっかりと固められた道を薬局へと向かっていた。

薬局のドアを引くと、ちりん、と小さな鐘が鳴った。

カウンターの中にいた男が目を上げ、いらっしやい、と無愛想な挨拶を寄越す。

魔女は磨かれたカウンターの上にバスケットを置き、被いの布を取った。森の中のおい　濃い緑と栄養豊富な土のおいが店の中に広がる。

「冬の間には仕込んだ物を持ってきた」

魔女の声はとても耳障りだ。

がらがらと掠れている老婆の声と、興奮気味に駆け回っているときの幼児の声とが合わさった不協和音でできている。

慣れている薬局の主は何も言わず、バスケットの中身を取り出しカウンターに並べた。

「歯痛の薬に怪我用軟膏。これはなんだ？」

嚴重に一つずつ包まれたあめ玉ほどの大きさの丸薬を取り出すと、魔女は全身を揺らした。どうやら笑ったらしい。

「猫いらずさね。本当にころりと行くから取り扱いには重々注意だよ」

「あんたは時々そういう質の悪い冗談をやるね」

「魔女つてのはそうしたもんさ」

「まあね。こっちのでかいのは？」

レングを半分ほどにした固まりが油紙で包んである。

「そいつは……」

魔女は居心地が悪そうにそっぽを向いた。

「石けんだ。思いの外たくさんできてしまったから売りに来た」

包みを開くとなにやら薄茶色のものが練り込んでいる。顔を近づけると、すつ、とする香りが鼻を抜けていった。

「ああ、これはいいね。きっとよく売れるよ」

「そんなつもりで作ったんじゃない」

「はいはい」

主は包み直すとこれも傍らに避けた。

帳面を引っ張り出し、ペンの尻でインク壺の蓋を開け、魔女が持ち込んだ品名と量を書き記す。

「代金はいつものようにガラス瓶でいいのかい？」

魔女は金が必要としていない。

衣類は見ての通りで、身を飾ることに興味は無さそうだ。

村人たちが決して足を踏み入れない森で自給自足ができてい
うで、食料品の類も村で買うことは無い。

そもそも村人たちは魔女をそこにいないものとして扱うのだから、
魔女は村で買いう物ができない。

そのため魔女は金ではなく、次回薬を持ってくるときに必要なガ
ラス瓶や薬包紙などを薬屋から受け取っていた。

「いや、今回は少し聞きたいことがあるんだ」

魔女が声を落とした。

主の手が止まる。

「それは魔法絡みで？」

「そう。だから他言無用」

「高く付くよ？」

「だから代金のかわりに、と言っているんじゃないか」

魔女は苛立つて足を踏みならしたがその音は子供のもののよう
に軽かった。

村でいないものとして扱われている魔女だが、実は村では母から
娘へと伝えられる秘密の話がある。

女だけに許された奥の手だ。どうしようもなく悲しく口惜しい思
いをした時にだけ使うことが許される、村の女たちの魔法。

誰にも見られることなく魔女の森を訪れ、魔女に全てを話して頼
むのだ。

魔女の小屋の戸を叩いた娘は、アンナ、と名乗った。

「川沿いの水車のある倉庫を知らない？ あれはうちのなの。粉ひきをやってるのよ」

戸の外にいるアンナは魔女の沈黙を了解と受け止めたらしい。

「パン屋の次男にハンスってのがいるの。あたしの幼馴染み。ちっちゃい頃から一緒だった。ハンスの兄さんのアンリも一緒だったしあたしの妹のビアンカも一緒だったわ。ついでに生まれたばかりのヨハンも、ああ、ヨハンってのはうちの弟。ヨハンはいわゆる恥かきっ子なんだわ。だけど父さんも母さんもそんなのお構いなしにそりゃあ嬉しそうよ。何て言っても跡継ぎが生まれたんですものね。まだ三歳の子に何を言ってるの、って魔女様は思いかも知れないけど、ヨハンが生まれるまではあたしに婿を取って家を継いでもらわにゃ、なんて父さんは言ってたわけだし、そうなるとやっぱリハンスに婿に来てもらわないとね、っていう話になるわけよ。次男だから来てくれるんじゃない、って。だけどレオおじさんももう年だから、アンリに店を継がせるにしてもいきなりアンリ一人じゃ心許ない、ってね。で、ハンスにもパン職人の修行をさせて。それをうちの婿さんだから、って藪から棒に粉ひき職人にかっさらっていくのも乱暴な話じゃない。まだ婿じゃないしね。だからまあ、レオおじさんやミーネおばさんもヨハンが生まれた時には一緒になって喜んでくれたわけ。あら、何の話だったかしら。そうそう、ハンスはね、あたしと結婚の約束してたの」

「婿に、ってことなんだね」

「あら、それとは別よ。魔女様、すごい声ね。風邪？ そうじゃないくてね、あたしとハンスはこーんなちっちゃな頃から……あらやだ、見えないわよね。喋りだしたかどうか、ってくらいの頃から結婚の約束をしてたわけ。なにしろほら、幼馴染みだから。まあその頃は結婚の意味なんかわかんないわよ。ずっと一緒にいる約束、くらいにしか思ってたないし。でもちよっとおっきくなってくると、女の子

ならどこにお嫁に行くかで人生変わっちゃうし、男だつて長男なら家を継がなきゃ、って考え始めるし、次男三男つてなると嫁さんもらうにも一苦労よね。ビエラーさんとこみたいにおっきな商店をやつてて町にも買い付けに行くから家族だけじゃ足りなくて人も雇わなきゃ、みたいなところなら次男や三男も働き口があつて困らないだろうけど、じゃあその次男や三男の子供つてなると結局おんなじなのよね。家に頼らずに自分で嫁さん食わしていかなくちゃならないんだから、村に留まるのかそれとも町に出て行くのかって早いうちに決めないといけないだろうし、かといってホイヤーさんとこみたいに一家で町に引つ越すつてのもまた勇気が要るわよねえ。ちっちゃい子がいなかったからできたんだろうけど、じゃないと家財一式荷車に乗せて越すのに半日かかる山越えて、なんてむりよねえ」

魔女は意地悪で戸を開けなかったのではない。

魔女のところへ村の女がやってきたときには戸を開けないのが決まりだった。

それをさっぴいても今日は魔女は竈の前から離れられなかった。

三日三晩に渡つて煮詰めてきた湿布薬の仕上げにかかつていたからだ。

「アナ、要点だけを言ってくれないかね」

「あらやだ。あたしはアンナよ、魔女様。要点って言つてもあたしとハンスのことを分かつてもらわないことにはあたしがどうしてこんなに悔しくつて、神様なんかじゃお話にならないから魔女様に縋りに来たのか、って説明にならないじゃないの」

村人と関わりを持たない魔女ではあるが、誰と誰が家族で、なんという名の者がどんな家業を営んでいるか、くらいのことは把握している。アンナとハンスが幼馴染みだということも、かけっこでも木登りでもハンスがアンナに敵わずに泣いて帰っていたことも知っている。

彼らの生活全てを覗き見しているわけではないのだから、当然知らないこともある。

魔女としては、アンナが悲しく悔しい思いをしたハンス絡みの事件を要領よくかいつまんで聞けばそれで充分なのにアンナの話は脱線が多すぎる。その上不必要な情報も多い。

「でね、魔女様。ちっちゃな頃とは違う結婚の約束をあたしが十二の時にしたわけ」

「あんだ、いまいくつだい」

「十八よ、魔女様」

村娘としては結婚してもおかしくない年だ。

「もちろんその十二の時の約束とは別に、ハンスは父さんや母さん、レオおじさんとミーネおばさんの前であたしと結婚するって言ったのよ。それがあたしが十四の時。家のこと、親のこと、兄弟のこと、全部わかるようになった分別のある年だったわ。ハンスは十五になつてたんだもの。うちの父さんはもちろんレオおじさんだつてちゃんとハンスの意思を確かめた。粉ひき職人になるためでもなければ、あたしが言わせたわけでもない結婚なんだ、つてハンスもはつきり言ったのよ。あたしが十七になつたら結婚して、ヨハンがおつきくなつて立派な粉ひきのおやじになるまではあたしたち夫婦が後見して、ヨハンが独り立ちしたらあたしたちは町へ移住するはずだったんだわ。そのためにハンスはまず町に仕事に出たの。だつてうちの父さんはまだ若いんだし、ハンスが町で働けるつてことがわかってから帰つてきて粉ひきの修行をしてもじゅうぶん間に合う、つて算段だったんだから。でもね、町に出たのが間違いだつたの。ハンスは休みの時にもめつたに帰つてこなかった。仕事を覚えなきゃいけないから、つて理由で週に一度あるはずの休みも町にいたの。そこで女を作ったのよ！」

煮詰まり、どろりとした深緑色の液体は鍋の中でぶくぶくと泡立っている。

頃合いよし、と魔女は鍋を火から下ろし、さらに掻き混ぜ続けた。粘りが強くなつていくがここでしっかりと混ぜながら冷まさないといい湿布薬にはならない。

「つまり、結婚の約束をしたハンスはそれを反故にして別の女に走った、でいいのかい？」

「それ以外のなんなの！？」

「結婚の約束などしていない。恋人と思っていたのは自分だけ。そんな可能性もあるからねえ」

「嘘だと思ったら父さんやレオおじさんに聞いたらいいわ！ アンリでもいい。あたしが十七になったら、って約束だったのよ。なのにハンスは、春になったら、夏になったら、秋になったら、ってどんどん伸ばして、冬の間はご奉公で帰れないから、って言い出してしまいいはもう俺のことは忘れて、って言い出したのよ。忘れるわけじゃないの。だってあたしもうハンスを知っちゃったのよ！

どうしたってハンスじゃなきゃだめじゃないの。それを、俺はもう二度と村には戻らないから、とか言って、それだってそうじゃないとあたしが村で暮らしにくいだろうから、なんてお為こかしで。

ほんととはただハンスが町で暮らしたいだけのくせに。ハンスが村から出て行こうがどうしようが村のみんなはあたしとハンスが結婚する予定だったなんてこと知ってるのよ！ そんな今更こんなことになってあたしどうしたらいいのか」

三日三晩のしわ寄せとアンナのわめき声とで魔女はとうとう耳鳴りがしてきた。頭痛もし始めている。

「あんたの話はわかったよ。魔女の鉄槌があるかどうかは一両日中にわかるだろうよ。今日はもうお帰り」

「知らせがあるの？」

「そんなものはありやしないよ」

アンナにさっさと帰ってほしい魔女の声はつんけんとしたものになった。だが魔女などそんなものだトアンナは思っているから怯みもしない。

「じゃあどうやったらわかるの」

「あんたの耳に入るさ。さあもう帰っとくれ」

アンナが未練がましく魔女の小さな家を振り返りながらもようや

く森を出て行ってしまうてから、魔女は薬屋へ行く支度を調えたのだった。

「使い魔を持てばいいのに」

丸いメガネの奥で薬屋の主の目が細くなった。

「何度も言ってるだろう。私はまだ使い魔を持てるような魔女じゃないんだよ」

苛々とした言葉を魔女が投げつけると主は喉を鳴らして笑った。

「そうだったね。じゃ、お尋ねの男の情報だ。ハンス・バリツシュ、十九歳。村のパン屋の次男。一昨年の春から町に奉公に出てる。勤め先はエレット堂。町じゃ一番の文具屋だ。読み書きにやや苦労することが多いため店内ではなく荷下ろしなど裏方が主な仕事だ。勤め振りは真面目。以上」

「以上？ それだけかい？」

「表向きはね。ここからがあなたの仕事に関わるところだよ、魔女殿」

魔女は鼻を鳴らした。

「仕事なもんかね」

「フエーベル子爵夫人が町にいるのは知っているかね？」

「知らないよ。誰だい」

「あんたに関わることだけ簡単に説明しようかね。湯治の名目で町に来ている未亡人だ。子爵が亡くなったのは去年だがここだけの話それには子爵夫人が絡んでいると言われている」

「おやおや、と魔女は呟いた。

「子爵が亡くなる以前から夫人の周囲は賑やかだったけれどね。さて、喪が明けるまではいやでもおとなしくしていなければならなくなつた夫人は、ならば賑やかになんて望んでもできっこない田舎に

押し込めてしまえばいい、ということになって、子爵家の残った人々から半ば強引に町へと連れてこられたわけだが、王都から離れるということは子爵家の目も届きにくくなる、ということでもあるわけだ。適当に使い捨てることができる遊び相手を探していた夫人は世間ずれしていないいたいけな青年を見つけてしまう」

「不可抗力だったとでも？」

「まさか」

不穏な響きで聞いてきた魔女に対し、主は首をすくめておどけて見せた。

「もう少しものを見る目を持つていればよかっただけの話だろう。この村しか知らなかったくせに、町の男と同じだ、と自分を過大評価し、また町の男のようになれると過信したからこうなったんだ」
わずかに苦笑しているような主はしかし辛辣に吐き捨てた。

「ハンスは毒婦の大勢いる遊び相手のうちのひとりさ。ハンスはそんなことも知らず彼女に入れあげてる。親も承知した結婚の約束も反故にして、婚礼の段取りも無かったことにするために息巻いて村に帰ってくるくらいにね」

「帰って？ ハンスは帰ってきてるのかい？」

「ああ。仕事がしやすいからう？」

魔女はまた不満げに鼻を鳴らした。

「だから仕事じゃないと言っているのに」

せっかくももらった休みもフェーベル子爵夫人との逢瀬に使っていたハンスだったが、ようやく意を固め村に帰ってきた。無論、アンナと結婚するためではなくその結婚話を白紙に戻すためだ。アンナとはすでに知らぬ仲ではなくなってしまうているが、そんな付き合いをしている男女は町には溢れていた。

だから言葉を尽くして説得すれば両親も、アンナも、アンナの両親もわかってくれる、と思っていた。

結婚する意思がなくなってしまったのだから仕方がないではないか。

しかしアンナには泣かれ、アンナの両親は苦虫を噛み潰したような表情をし『ご両親と一緒に来てくれ』と言うなりハンスを家から追い出した。何度戸を叩いても呼ばわってもそれきり戸を開けてくれない。

最後に実家で両親を目の前に、アンナとの結婚はしない、と言ったのだが、その途端父に殴られた。麵棒で殴られなかっただけましと思え、と怒鳴られ、町で浮ついた生活をしていたからそうだったのだ、と決めつけられた。こんなつもりで町に出したわけではない、と奉公を辞める話にまで発展し、ハンスは慌てた。

町に帰れなくなってしまうたら子爵夫人と会うこともできなくなってしまう。

町ならばともかく村では金を稼ぐ手段が無いに等しい。実家のパン屋は未だ父のレオが現役だし跡を継ぐのは兄のアンリだ。手伝いをしてもただ働きか、よくて小遣いをもらえるていどだろう。ただでさえ裏方の奉公人であるハンスの給金は安いのだ。これで村に引っ込んでしまったら子爵夫人を喜ばせることができなくなるのは想像に難くない。

仕方なくハンスは村にいるあいだ実家の店を手伝うことにした。従順なふりをして、隙を見て村を逃げ出せばいい。町や奉公先には親の手が回るかもしれないが、そうしたらもつと遠い町へ行けばいい、なんとすれば子爵夫人と共に王都へ行ってもいい、とまで考えた。

幼馴染みのアンナに愛情を感じていなかったわけでは無いし、捨てていくことへの罪悪感もあったが、ハンスには自分の幸せしか見えていなかった。それこそ自分だけで、子爵夫人の本心なども皆目わかってはいなかった。

夏の暑さが過ぎ、朝晩の冷え込みに上着が欲しくなった頃、魔女は薬屋を訪れた。

「いらつしやい」

「今年の夏はいまひとつだった」

バスケットは軽かった。だが主は表情を変えずに被いの布を取り、中身を取り出す。

「石けんがあればよかったのに。あれは本当にすぐ売れてしまった」

「冬の仕事ならともかく夏に作るのは面倒なんだよ」

「今回は？ ガラス瓶でいいのかい？」

「ああ。ガラス瓶と油紙をおくれ」

主は魔女の持ってきた品物に見合うだけのガラス瓶と油紙を取り出す。とはいえこれは次回、あるいは次々回に中身が入った状態で薬屋に戻ってくるのだから正しく見合っているとは言えない。

「他には？」

「無いよ。必要な物は自分で揃えられるんだから」

魔女はどうやら胸を張ったらしい。何枚も重ねたシヨールで丸くなった体が少し反った。

主は肩をすくめただけで

「では、情報は？」

と聞いた。

「欲しい情報は無いよ。あんたが話したいと言うのなら別だけど」

「ハンスが村に腰を落ち着けるそうだよ」

やや間があつて魔女は全く感情のこもらぬ声で、へえ、と言った。「アンナと結婚してね、アンナの親父さんの手伝いをする事になった。婚礼は来年の春だが二人はもう一緒に暮らし始めてるよ。なんでも村に帰ってきてすぐ、実家のパン屋を手伝っているさいちゆうに腰を痛めたそうだね。ところがうちに湿布薬の在庫が無いときたもんだ。わたしもどうもあんたをあてにしすぎていたらしい。か

わいそうにハンスは一週間近く腰も伸ばせずに寝たきりだったらしいよ。ぼちぼち動けるようになったはいいがそんな体で荷を積んだり降ろしたりする裏方仕事ができるはずもない。仕方なく町での奉公を辞めて村で暮らすことになった、というわけだ。これだけならめでたしめでたしなんだが」

主は丸いメガネの際から魔女をちらりと盗み見る。

シヨールにぐるぐる巻きにされた魔女の様子はやはりはつきりしない。

「癖になっちゃったらしくてなあ。くしゃみをしたと言っては腰を痛め、重たい物を持ち上げようとしてはぶり返し、変な姿勢で立ち上がりかけてはぐきりとやるそうさ。それがまた不思議なことにアンナや両親とケンカした日に限ってやるそうでねえ」

「へえ」

魔女の噎れた喉から笑い声が漏れる。

「それはいい気味だ」

「まったく見事な魔女の一撃だ。ところでこの間の荷にも今日のも入っていないんだが、湿布薬は卸してくれないのかね？」

「さあてね。婚礼が済むまでは様子を見させてもらおうかと思ってるんだ」

主は首を振りつつ言った。

「そんなにもあなたの憎しみは深いの？」

魔女の纏う空気が一瞬で冷たくなる。

「なんだって？」

「うちのお祖父ちゃんのせいなんでしょう？ あなたが魔女になっちゃったのは」

魔女が魔女ではなくただの娘だった頃、娘には恋人がいた。交際

を反対されることもなく、むしろ早く結婚して孫を見せてくれ、と互いの両親に言われていた。

恋人が親の言いつけで買い付けの旅に出たのは、婚礼を二ヶ月後に控えた、冬の終わりのことだった。春までにはなんとしても戻ってくる、と村を出て行った恋人は雪が溶けても春を告げる小鳥が囀るようになっても帰ってこなかった。夏が過ぎ、秋が終わり、また冬を迎えても帰ってこなかった。

旅の途中で死んでしまったのだ、と誰もが思い始めた頃、恋人は見つかった。

彼は町で暮らしていた。怪我をし記憶をなくした彼を介抱した娘と結ばれていた。

半狂乱になった娘を見て恋人は記憶を取り戻したが、だからといってすでに腹に子がいる妻を捨てるわけにもいかない。

恋人は妻を伴い村に戻ってきた。そうして家業を継いだ。

娘は。

森へと駆け込んだ。娘もまた母から、悲しく口惜しく、自分ではどうにもできないことが起こったなら森の魔女を頼れ、と教わっていたためだ。

娘は恋人に魔女の鉄槌が下ることを望んだのだ。

だが、恋人だった男に魔女は何もなかった。娘は裏切られたのではない。これは不可抗力だった。娘がつらく悲しい思いをしたのと同じように、記憶が戻った男もつらく苦しい思いをした。

娘はそうした魔女の説明を受け入れられなかった。

私だけが苦しい。私だけがつらい。私だけが不幸だ。そう魔女に訴え続けている内に、もとから森にいた魔女は姿を消してしまい、娘が魔女になっていた。

「もう百年もすれば使い魔が持てるようになる。そしたら情報は使い魔に集めさせる。もうここには来ないよ」

魔女はショールを体の前へとかき寄せると、空になったバスケットを腕に提げた。

「それは困るな。あんたの作る薬はもちろん、ハーブ入りの雑貨は村の奥さん方の必需品なんだ」

「そんなもの」

魔女の後ろ姿が揺れる。

「町から仕入れてくればいいさ。もっと遠くの町には私なんぞが作るよりもよほどいい物が溢れているだろうよ。そうしたものが村に入ってくるようになれば」

魔女が戸を開ける。

ちりん、と鐘の音が悲しげに響く。

「いないものとして扱わなくても、本当にいなくなっちゃまうのさ、魔女なんてものは。そして魔女の魔法も必要なくなる」

魔女がいなくなった後もしばらく、店内には、森深くに香る緑と土のにおいがした。

（後書き）

ぎっくり腰：欧米ではその病態から「魔女の一撃」とも呼ばれている。

癖になるとほんとにくしゃみで再発する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7215y/>

魔法の使えるたった一つの魔法

2011年11月21日16時31分発行